① 騙された狐

昔、或る村はずれに細ぼそと暮らしていた爺さんと婆ぁさんがいました。此の家から町に行くには広い広い野原を歩いて行かなければいけなかったが、此の野原には人馴れした狡賢い一匹の古狐が住んでいました。秋も深まった昔の或る日のこと、たまたま爺さんは自分の家で開かれる、あしたの無尽講の準備のために、町に買い物に出かけました。ところが、此の野原に差し掛かったら、例の古狐が現れて「爺さん爺さん何処へ行くのかやー?」と問い掛けるので、爺さんは何食わぬ顔をして「おやおや　お前は迎えに来てくれたのかやー?おらー　町まであしたの無尽の準備に行く所だでゃ、今日　この野原に町から戻って来るのは、大方夕方の頃になると思うでゃー」と挨拶を交わして通り過ぎました。爺さんが町に行って夕方まで戻らないことを知った狐は、丁度　爺さんが町から急いで戻れば、家に帰りつく頃の時間を見計らって、留守をしていた婆ぁさん所へ行き「婆ぁさん　いま町から戻ったでゃ」と声を掛けたので、婆ぁさんは慌てて出て行き「おやおや今日は滅多にないこと早かったなあー」と言って出迎えました。然しうちの爺さんは日ごろ右目が悪かったのに、此の爺さんは左の目が悪いので「屹度またあの野原の古狐の悪ふざけだな」と思ったが、そ知らぬ振りをして「爺さん　また何時も通りの粕汁で酒っこかよー?」と聞くと、爺さんに化けた狐は、ちょっと俯き加減にして「その通り　その通り」と言うのでした。それで婆ぁさんは粕汁に油揚をたっぷり入れて「おかず」を作り、早速お酒を熱燗にして「さぁーさぁー爺さん　また何時も通り婆ぁさんのお酌でかよー?」と聞くと、爺さんに化けた狐は、唯「その通り　その通り」と言って食うわ飲むわの大忙し。婆ぁさんは鰹腹、腹に詰め込んだ狐に頃合いを見計らって、「爺さん爺さん今夜も何時も通り手足を縛って、袋に入って寝るのかよー?」と聞くと、狐はまた「その通りその通り」と答えたので、婆ぁさんは爺さんの手足を縄で縛って袋に入れ、袋の口を麻縄で固く縛りあげ、物置の梁に吊るして爺さんが町から帰って来るのを待ちました。

夕方になって町から戻った爺さんは、今までの一部始終を婆ぁさんから聞き、何処となく怪しげな今朝の古狐の様子に、ふと思い当たる節もあり「よーし　此の古狐を騙して一儲けしてやろう」と思案して、丁度　狐が目を覚ました頃合いを見計り、作り声で「爺さん爺さん　寒くねゃがでゃ?未だ眠っているのかやー?」と優しく聞いて見ました。ところが先程から小便が出て目を覚ましていた狐は、袋から出るにも出れないで、困っていた時だったので、驚いて「ぎゃーぎゃー」と叫び「これからは決して悪い事をしないから、此の度だけはどうか勘弁してくれ」と頼むので、気の毒になった爺さんは梁から袋を降して狐を出してやりました。然し手足を固く縛られて小便をするに行くにも行けないで、漏れそうになった狐は「爺さん爺さん　今度からは爺さんの言うことは何でも聞くから御免してくれ、どうか此の縄を解いて小便所へ行かせてけれでゃー」と、泣いて頼むので「何も格別詫びることなどないから、俺の頼み事を一つ聞いてけねゃがでゃー?」と爺さんが聞くと、狐は再び「何でも爺さんの言う事なら聞くから、速く此の縄を解いてくれ」と身体を揉み揉み頼むので、手足の縄を解いてやりました。漸く小便を終えてゆっくりした狐は「あー助かった、所で爺さんの頼み事とは何だでゃー?」と聞くので、爺さんは「それは何も難しい事ではないが、ただ隣の家の爺さんに化けて、うちで開く明日の無尽に来え貰えば良いのだ、然しそれには拾円の掛け金が必要だから、お前はこれから野原に戻って枯れ葉で贋札を作り、それを町で本当の札と交換し、隣の爺さんに成り済まし、間違いなく拾円の掛け金を持って出席してくれ、そうすれば魚や酒っ子は勿論のこと、油揚の粕汁も食い放題に飲み放題、何でも鱈腹ご馳走するから頼まれてくれねゃがでゃ?」と狐を騙してみました。「そんな事なら朝飯前だ」と喜んで野原に帰った狐は、枯れ葉で二枚の拾円札を作り、これを町で一枚の本物の札に交換することにしたのです。

町の人達は一枚を二枚の札と交換するのだから、「世の中には実に間抜けな人もいるものだなー」と思いながらも、大喜びで交換してくれたので、古狐は翌日の朝に約束通りの掛け金を持って、意気揚々と爺さんの家にやって来ました。

既に爺さんの家には一〇人位の客が集まっていて、「やぁ！やぁ～隣の爺様　身体具合はなんとだでゃ？到底容易なことでは来て貰えないものと思っていた所だったでゃ」と言うので、隣の爺さんに成り済ました狐は「うん今日は久々に幾らか身体具合が良い様だので、皆様方の顔も見たくてやって来たでゃ」と挨拶しながら、例の掛け金を納めました。やがて無尽講も無事に終わって鱈腹ご馳走になった狐は、蒲鉾や焼魚や油揚などのお土産をどっさり背負って、仲間の狐共の待つ野原へ大喜びで帰って行き、今日の無尽講の楽しさや面白さを仲間の狐共に語って知らせました。

それから五日ばかり経った後の事、例の狐がまたやって来て、「仲間に先日の無尽講の楽しさを教えたら、是非私共もその無尽講に連れて行ってくれと頼むので、掛け金のことは絶対心配させないことを条件にして、何とかならないものだがでゃ？」と、手を合わせて頼むので「よしよし顔見知りのお前のことなら何とかするべぇー、では婆ぁさんと相談して焼鳥や兎の刺身なども沢山に用意しておくことにするが、それまで料理の準備や金の勘定のことなどのほか、帳簿付けの仕事などもあって色々と忙しいから、三日後の昼頃に一人当たりの掛け金を拾円ずつ持って集まってけれやー、唯　枯れ葉の札は固くお断りだでゃ！」と爺さんは少し勿体振って言いました。やがて三日後の昼頃、人間に化けた狐共が一四、五匹ばかり、それぞれ拾円ずつの掛け金を持って、ぞろぞろとやって来たので、爺さんはさも威元らしい勿体を付け、帳場に座り、一人一人から掛け金を納めさせ、帳簿付けする振りをした後「この無尽講は我々で新しく作った『飲み食い無尽講』だから、どうぞみんなで鱈腹飲んで食って、歌って踊って楽しんでけれゃー」と挨拶を述べ、いよいよ婆ぁさんにお膳を配って貰ったが、その料理を見た狐共は吃驚仰天。油揚の粕汁に焼魚や焼鳥に兎の刺身など、食べ切れない程の料理に拍手喝采。大満足した狐共は飲む・食う・歌う・踊るの大騒ぎ。何しろ昔々の事だから拾円値の酒や魚は、とても一人では飲み食い出来るものではありません。狐達の中には酔い潰れて尻尾を出す者、或いは前の流れに反吐を吐く者などもおり、夜遅くまでてんやわんやの大騒ぎ、兎も角も狐共は大喜びをして帰って行ったとさー。

どっさり余りの金を手にした爺さんと婆ぁさんは、二人で大喜びをしていたのであるが、そこへまた例の狐がやって来て「此の度の無尽は少しばかりでなく嬉しくて何ともならねゃでゃー、今度から一〇日おき毎に、あのような無尽講を開いてけねゃがでゃー？」と頼む有様で、その度毎に「余り金」の大金を手にすることが出来た爺さんと婆ぁさんは大金持ちになり、一生安楽な暮らしを送ったけどゃー。騙された狐の長い長いの話っこはこれでトッピンパラリのプー。